大森と今村の東京大地震予知論争再考

The Dispute on a BigTokyo Earthquake between Dr.Oomori and Dr.Imamura

泊 次郎 [1]
Jiro Tomari[1]

[1] 東大震研
[1] ERI

明治時代の末、東京帝国大学の地震学の教授・大森房吉と、助教授の今村明恒との間で、東京に近い将来大地震が起るかどうかをめぐって争われた地震予知論争はよく知られている。激しい論争になった理由としてこれまで、震災予防調査会の幹事も勤め、地震騒ぎを常に鎮静化する役割を負わされていた大森と、大森と２つしか歳が違わないのに無給の助教授で、本音を気楽に語ることができた今村の社会的な立場の違いが大きかった、と説明されてきた。しかし、2 人について改めて調べてみると、地震予知についての考え方や地震災害観が大きく異なっており、こうした違いも無視できない、と考えられる。

2 人の論争のきっかけになったのは、今村が当時の総合雑誌『太陽』の 1905 年 12 月号に発表した論文である。論争のその後の経過や論点については、藤井陽一郎『日本の地震学』（1967 年）や山下文男『君子未然に防ぐ－地震予知の先駆者今村明恒の生涯』(2002 年) などに詳しいので、本稿では省略する。論争は、死者 10 万人以上を出した関東大震災（1923 年）で不幸な結末を迎えた。出張中のオーストラリアで地震発生を知った大森は急遽帰国したが、病気が悪化しまもなく死亡。今村は、大震災を預言した地震学者として、一躍時の人に祭り上げられた。

今村は、1926 年に出版した『地震の征服』の中で「大森先生と自分の考え方には大きな違いはなかったが、自分が無理解な社会に未熟な意見を漫然と発表したのがまずかった、大森先生は『民心鎮静の犠牲』になられたのである」などと書いた。

今村のこの叙述が影響したのか、藤井や山下の著作をはじめとするこれまでの地震学史では、大森と今村の予知論争が激しいものになった理由について、2 人の社会的な立場の違いが強調されている。しかし、2 人の地震予知に対する考え方、災害観の違いは 2 人の社会的な立場以上に大きなものがあった。

まず第 1 に、大地震はどこで起きるかという問題である。大森は、地震は地震がよく起る地震帯で起きるが、一度大地震が起きた同じ場所では再び大地震は起こらない、従って大地震の再来間隔を統計的に議論しても意味がない、と考えていた。

これに対して、今村は大地震は同じ場所で繰り返して起きると考えていた。従って、歴史地震を統計的に分析することには大いに意味がある、という立場に立っていた。

第 2 は、直前予知に対する考え方の違いである。大森は、大気圧の変化、降水量の変化、潮の干満などが地震の引金を引くのではないかと見て、これらの誘因と大地震の関係について研究すれば、直前予知が可能である、と考えていた。

一方今村は、誘因の研究よりも、その場所に地震を起す「原動力」が準備できているかの方を問題にし、地殻変動特に直前の地殻変動によって地震の直前予知が可能になるのではないかと考えていた。

第 3 は、震災観の違いである。大森は、イタリア地震（1895 年）、インド地震（1905 年）、台湾の嘉義地震（1906 年）など海外での大地震の調査の経験から、死者のほとんどは建物などの倒壊による圧死者で、それは耐震性がほとんどないお粗末な構造に原因があると考えていた。それに比べると日本の木造建築は耐震性が高いので、「死者が５万人を超えるような地震は日本では起らない」と述べていた。

これに対して今村は、日本の歴史上の地震の分析から、地震の後に火災が起ると、死者の数は４倍に増えることに着目し、震災火災の恐ろしさを説くようになった。関東大震災では、今村のこの予測が不幸にして的中した。

以上のように、2 人の地震予知観、震災観は大きく違ったが、2 人の間にはほとんど会話がなかった。従って、双方の考え方の相違もお互いにほとんど認識していなかった。それが、論争を烈しくした最も大きな要因であったのではないかと考えられる。